

韓国の公的灌漑管理制度に対する農民意識の分析
- 論山市塔亭地区の例 -

Analysis of Farmer's Senses about Public Management System
- A case of Tapjung Project in Nonsan City -

○ 申 文浩* ・ 佐藤 政良* ・ 石井 敦* ・ 金 泰喆**

SHIN Moono ・ SATOH Masayoshi ・ ISHII Atsushi ・ KIM Taicheol

1. はじめに

発展途上国における灌漑管理の効率性・持続性向上のため、1990年代から、世界銀行を始めとして、各地域の国際銀行が灌漑排水事業の融資条件としてPIMを導入するようになった。(石井・佐藤, 2003)。一方、韓国、台湾、日本のような工業化が進展した国では農業用水の管理に国が直接関与したり、管理費を負担したりする公的管理強化が求められている。特に韓国では、1980年代から管理費の一部を負担する公的補助管理が行われ、2000年には各市・郡に1ヶ所あった農地改良組合、その連合会、基幹施設などを管理していた農漁村振興公社が統合され、農業基盤公社(Korea Agricultural & Rural Infrastructure Corporation, 現、韓国農漁村公社, 以下、KRC)が誕生し、農民の水利費負担を免除するとともに農業水利施設を全面的に管理することとなった。今日一定規模以上の農業用水の水利施設はすべてKRCが管理している。この体系が打ち出された際、KRCは末端水路部分については農民自身が操作と維持を担うことを想定していた。しかし、その期待は実現せず、農民は水管理への参加意識を失った(申ら, 2011)。この事態を改善するため、KRCは農民参加を促すための施策を打ち出しているが、十分な成果を収めているとは言えない。今後有効な施策を検討するためには、現在灌漑の現場でどのような事態が生じているかについての正確な分析が欠かせない。

そこで、本研究では、公的管理の下で、約10年経った現在、農民は水管理について、どのような意識を持っているのか、システムに満足しているのか、将来の水管理にどのような意識を持っているのか、などについてアンケート調査を中心に検討した。

2. 検討の方法

対象地は、韓国の代表的な米の生産地である忠青南道論山市夫赤面塔亭里に位置する塔亭貯水池灌漑地区である。塔亭貯水池は、流域面積218.8 km²、総貯水量30,701千m³、受益面積5,713ha、最大取水量4.43 m³/sのフィルダムで1944年に竣工した。1999年までは論山農地改良組合が管理してきたが、2000年以降はKRCの論山支社に管理が移った(Fig.1)。

検討のため、塔亭地区北部幹線の上流部とブファク幹線の地区内(合計受益面積980ha)を歩き、出会った農民すべてに対し、①個人基本情報、②水管理制度への認知度、③取水行動、④維持管理活動、⑤現在のシステムに対する評価、⑥水管理の改善について対面式でアンケートを行った。

* 筑波大学生命環境科学研究科 キーワード：水管理、公的管理、参加型水管理、韓国農漁村公社

** 忠南大学農業生命科学

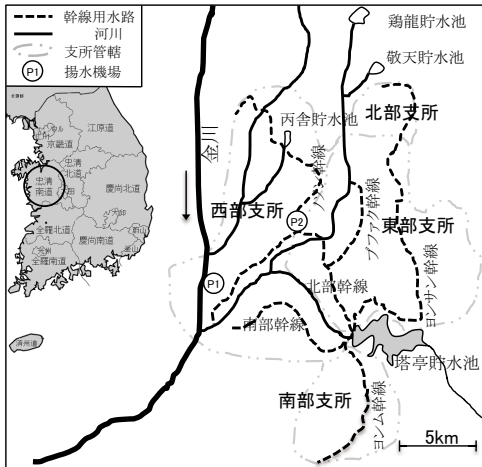


Fig. 1 塔亭灌漑システムの概略図

Outline of Irrigation System of Tapjung

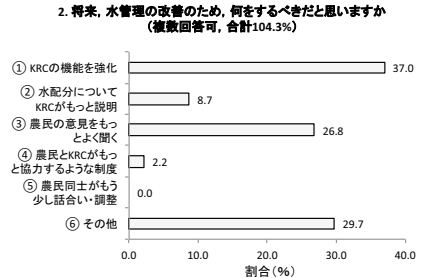
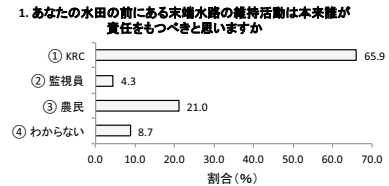


Fig. 2 アンケートの結果

Result of Questionnaire

3. 結果および考察

アンケートの回答者数は138名(男性123名, 女性15名)で, 5名を除いてアンケートに応じた. 回答者の経営農地面積の合計は198ha(平均経営面積1.27ha)で, 検討対象地区面積980haの約20%に相当する. なお, 受益者のリストが存在しないため, 人数の割合は不明である.

農民は全体として, 60.1%が公的管理になって良かったと評価しているが, 24%が水路機能が低下していると否定的な評価をしている. これは, 末端水路の維持活動について, 農民とKRCの責任分担に関する法的な不明確さの下で, 関係者の合意が形成されず, 維持管理が適切に行われていないからである.

Fig.2は末端水路の責任と将来の改善に関するアンケートの結果である. 末端水路の維持管理については, 70%を超える農民は末端水路の維持管理の責任がKRC側にあるとしており, 21%の農民が農民にあるとしている. また, 将来の水管理については, 77.5%の農民は現在の管理方法で将来もうまく管理できると回答しており, 水管理の改善のために行うべきであるものとして, KRCの機能強化35.4%, 農民の意見を良く聞く25.7%を挙げているが, 農民とKRCがもっと協力する制度が必要とするもの2.1%, 農民同士でもっとよく話し合い・調整するという意見は皆無であった.

6. おわりに

末端に至るまでの全面的な公的管理をするためには, 各水田水口の管理権をKRCと農民のどちらが持つかという問題が生じ, 解決は困難である. したがって, 公的管理のさらなる強化ではなく, ある程度の農民参加による管理が不可欠である.

現在の農民は自分たちで末端水管理問題を解決する意思をほとんど持っていないので, 農民に如何に参加意欲を付与するかが課題になる.

< 参考文献 >

- 1) 石井 敦, 佐藤政良 (2003) : PIM, 農村計画学会誌, 22(3), 239-240
- 2) 申 文浩, 佐藤政良, 李 相潤, 金 泰喆 (2011) : 韓国農漁村公社の公的灌漑管理システムにおける末端管理, 農業農村工学会講演会, 60, 466-467